様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月　９ 日現在

機関番号：３４５３４
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2022
課題番号：１７Ｋ１２５０８

研究課題名（和文）在宅死を迎える患者を支援するために必要な看護能力に関する研究

研究課題名（英文）Research on Nursing Skills Required to Support Death at Home

研究代表者
鈴木　千絵子（Suzuki, Chieko）

姫路大学・看護学部・教授

研究者番号：３０５６３７９６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,900,000円

研究成果の概要（和文）：訪問看護師による在宅死を可能にする能力は,インタビュー調査から「客観的な立場で環境の調整と指導」「連携と継続した管理」「相談と要望の実現化」「迅速な対応」「高度な技術」「丁寧な態度」であることが明らかになった.次にこれらの結果から「在宅看護における看取りの為の訪問看護能力尺度」を作成するために看護支援34項目について全国調査し,「家族を尊重する3項目」「患者の状況を伝える3項目」「自分に責任を持つ3項目」「多職種と連携する3項目」「訪問看護に関する技術と知識2項目」の14項目が抽出され内的妥当性を確認した.モデルの確認においてもCFI0.965RMSEA0.059と概ね良好な尺度が作成された.

研究成果の学術的意義や社会的意義
訪問看護師による在宅死を可能にする看護支援とは何かを明らかにするために質的研究と量的研究を通して研究した。インタビュー調査では、訪問看護を提供する側の看護師からと、受ける側の家族からの双方からの意見を聞き、看護師の資質だけでなく対応の早さや態度も求められていた。アンケート調査で「在宅看護における看取りの為の訪問看護能力尺度」14項目を作成し、在宅で死を迎える患者看護の指標となる可能性が示唆された。

研究成果の概要（英文）：This study empirically clarified the nursing support that enables home-based deaths by visiting nurses through qualitative and quantitative research.First, we conducted interviews with nurses who provide home-visit nursing and their families. We extracted the qualities that are considered necessary for visiting nurses.Next, we prepared 34 items on nursing support that enables home-visit nurses to die at home, A total of 1032 respondents responded. From the analysis of the data, we extracted "attitude of accepting and responding to patients' families," " grasping and evaluating changes," "attentiveness with a sense of mission," "collaboration and information sharing," and "nursing skills and knowledge related to home-visit nursing" for nursing support that enables home-visit nurses to die at home.
These were named as the "Home-visit Nursing Ability Scale for Nursing Care in Home Nursing" Cronbach's α were 0.95. Internal consistency checked and confirmed.

研究分野：高齢者看護

キーワード：高齢者看護　在宅看護　家族支援

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

研究課題名
　在宅死を迎える患者を支援するために必要な看護能力に関する研究

１．研究開始当初の背景
　世界で最も急激な高齢化を経験している我が国においては、人生の終末を過ごす場所の問題には高い関心が寄せられている（秋山ら、2013）。平成 20 年度の厚生労働省の調査によると、終末期の療養場所として自宅を希望する者は約 63%に上るものの、実際は自宅で最後まで療養できるようになるのは難しいと考えている者が 66%を占めている（厚生労働省 2008）。また平成 21 年時点で在宅で死亡する方は全体の 12.4%(厚生労働省人口動態統計)にとどまっている。一方で、欧米諸外国では自宅やケア付き住宅での死亡が約 6 割を占めている（武林、2012）。
　高齢者の看取りにおいては、様々な議論がこれまでになされてきた。つまり、介護保険の始まった 2000 年から 24 時間在宅医療での連携加算が可能となり、その後かかりつけ医機能の確立と在宅療養支援診療所・病院の創設と在宅での看取りが可能な環境が整いつつあるものの、まだ在宅医療の体制としての医療機関との連携や人材育成についてはまだ医療計画・介護保険事業計画として「求められる事項」となっている（2012 厚生労働省医政局指導課在宅医療推進室）。

在宅における看取りの充実をはかるために、看取り加算が平成 24 年から加わった。しかしながら看取り看護の大切さは分かっているものの、その理解や方法については、それぞれ看護師個人や医師に委ねられている場合が少なくない。また、高齢者の緩和ケアにおいても、医師の判断を中心に家族や本人の意向により、死が近づくにつれ診療のための訪問回数を増やし、それに合わせた形で看護師が苦痛の緩和や家族への支援を行うことが一般的である。

しかし一方で、家族の立場からすると、病院を離れ自宅での療養では、いつでも主治医や看護師が側にいるわけでないという現状がある。相談に乗ってくれ連絡すれば来てくれる安心感はあるものの、どの程度で要請するのか不安もあり躊躇している現状もある。在宅看護においては顔の見える関係で信頼関係もあるからこそ、死が近づいているからといって特別な看護を要求するわけにもいかず、また不安だからと入院させるわけにもいかない。家族にとっては経験も少なく不安の中で看取りがどのような意味を持つのか理解する機会もないままに、死にいくことを冷静に受け止めることを強要されている現実があるのではないか。

これまでに主に使われている死の判定基準は、「心臓拍動停止、呼吸停止、および脳機能の不可逆的停止を示す瞳孔の対光反射の消失をもって三徴候死とする（WEBLEO 参照)」である。医師は、個人差はあるもののおおよそ死の 24 時間前を察知しているといわれている。看護師もまた、それらの徴候を把握しているが、死に直面した本人に特別な看取りのための看護というものは現在の日本では存在していない。それよりも、死を目前にし日々変化する体調に合わせて対処療法的な看護か家族の意向に沿う看護、あるいは精神的なサポートを行っているという現状である。

２．研究の目的
　家族にとって死にゆく人の為に求めている看取り看護とは何か、同時に看護師が行うべき看取り看護とは何かを明らかにすることで、人を看取るための看護のあるべき姿が見えてくる。本研究では、在宅死を支援するため「在宅で安心して死を迎えるための看護能力尺度」を開発する。この尺度を使用することで、看護に必要な能力の育成およびその成果について可視化することができる。

３．研究の方法
まず、第一段階として、在宅看護で看取りの経験のある看護師とその家族を対象に調査を実施する。過去の看取りの場面を 3 段階（介入開始時・中期・終末看取り時）に分け、それぞれ実施した内容、感じたこと、悩みや迷い、反省点などの聞き取り調査を行う。家族にも同様に家族として実施したこと、感じたこと、悩みや迷い、反省点などの聞き取りを行う。それぞれ家族や医療者に期待したことや満足・不満足感の要因、それらの成り行きについても調査する。この一段階の目的は、在宅で死を迎える場合の看取り看護の実態を看護側からと家族側の両面から明らかにすることである。

次に、第二段階として、第一段階の研究結果をもとに在宅看護で看取り看護を行うための能力の項目を量的調査によって検証する。そのためには、質的研究で得られた在宅で看取りをする上で起こりうる全ての項目から、看取り看護に必要な取得するべき能力についてアンケート項目に起こし、それぞれ「全くそう思う」「まあそう思う」「あまりそう思わない」「全くそう思わない」の4件法で2000人を対象に量的調査を行う。さらにこれを「在宅で安心して死を迎えるための看護能力」としての構成概念妥当性を検討し、共分散構造分析を行いて尺度として完成させる。この二段階の目的は、在宅で死を迎える場合の看取り看護に、どのような能力が必要なのかを構成概念妥当性を持った上で構造的に明らかにすることである。そして「在宅で安心して死を迎えるための看護能力尺度」を開発する。

次に、第三段階として、第二段階で得られた「在宅で安心して死を迎えるための看護能力」尺度を使用し、現在、訪問看護ステーションおよび施設等で働く看護師の能力を測定する。同時に、同じ対象者に対して、尺度の併存的妥当性を検討するために、既存の「看護自立度尺度」「在宅における看護実践自己評価尺度」を測定する。これらの測定と看護師の属性を検討することで、この尺度の内容妥当性、構成概念妥当性，併存的妥当性を検討することが出来る。この第三段階の目的は、「在宅で安心して死を迎えるための看護能力尺度」の妥当性および信頼性を証明することである。

４．研究成果

平成29年から平成30年にかけて、高齢者における住宅での看取り看護における現状と課題について取り組んだ。これまで家族を自宅で看取り、その際に訪問看護を利用した6名の主介護者にインタビューを行った。同時に訪問看護師にもインタビューを行った。

平成31年度から令和2年度には、訪問看護を提供する側の看護師および、受ける側の家族に対しての、それぞれのインタビュー調査（質的研究）結果から、訪問看護師に必要だと思われる資質を導きだした。その内容は、「客観的な立場で環境の調整と指導」「連携と継続した管理」「相談と要望の実現化」「迅速な対応」「高度な技術」「丁寧な態度」として抽出された（学会発表および論文投稿を行った）。

これらの結果を踏まえて、令和2年度からは、訪問看護師による在宅死を可能にする看護支援について必要な能力34項目を作成し、全 国1500か所の訪問看護ステーションを対象として量的調査を行った。この頃より、コロナ感染症の拡大の影響を受け、調査が進まないなどの障壁があったが、全国の施設から回答のあった237か所から、合計1032名の回答を得ることができた。

そのデータ分析から、訪問看護師による在宅死を可能にする看護支援の内容として、「患者家族を受け止め応じる姿勢3項目」「変化の把握と評価3項目」「使命感を持ち気配りする3項目」「連携と情報共有3項目」「訪問看護に関する技術と知識2項目」が抽出された。これらを「在宅看護における看取りの為の訪問看護能力尺度」の下位尺度として仮命名し、因子分析を行った結果、Cronbach’s α係数は，それぞれ，0.88，0.90，0.86，0.81，0.92であり、全 体では0.95であった。そのため、これら14項目から成り立つ尺度としての内的整合性は確認された。因子構造モデルの確認においても、CFI0.915、RMSEA0.059 と概ね良好な適合性を確認した。さらに尺度の併存的妥当性も確認することができ、尺度としての信頼性と妥当性を確認できたといえる。

今後は、これらの発表と投稿、さらに、実際にこの尺度を使用した上での検証が必要である。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計1件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 鈴木千絵子	４．巻 3
２．論文標題 訪問看護を利用した介護者が感じる訪問看護師の良い点と悪い点	５．発行年 2020年
３．雑誌名 姫路大学大学院看護学研究科論究	６．最初と最後の頁 55-66
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計5件（うち招待講演　0件／うち国際学会　2件）

１．発表者名 鈴木千絵子
２．発表標題 在宅看護における看取りの為の訪問看護能力尺度の開発（第1報）
３．学会等名 第42回看護科学学会学術集会
４．発表年 2022年

１．発表者名 Chieko Suzuki
２．発表標題 :Family Opinions about Visiting Nurses that Care for the Elderly - from interviews with the patient’s families -
３．学会等名 The 4th International Conference on Prevention and Management of Chronic Conditions.
４．発表年 2020年

１．発表者名 Chieko Suzuki
２．発表標題 A Qualitative Study of Abilities Required of Visiting Nurses - interviews with end-of-life care visiting nurses-
３．学会等名 The 23rd EAST ASIAN FORUM OF NURSING SCHOLARS international EAFONS conference
４．発表年 2020年

１．発表者名 Chieko Suzuki
２．発表標題 A Qualitative Study of Abilities Required of Visiting Nurses
３．学会等名 23rd East Asian Forum of Nursing Scholars (EAFONS) conference（国際学会）
４．発表年 2020年

１．発表者名 Chieko Suzuki
２．発表標題 Family Opinions about Visiting Nurses that Care for the Elderly
３．学会等名 The 4th International Conference of Prevention and Management on Chronic Conditions（国際学会）
４．発表年 2019年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関